

メッセージアウトライン

ヨハネ13：1~11「イエスの愛」

過越の祭りが間近に近づいて来た時、イエスはこの世を去って父なる神のみもとに行くべき時が来たことを知られた。(1)「世にいる自分の者」とはイエスを救い主と信じ受け入れた弟子たちのこと。他の大部分のユダヤ人はイエスを受け入れていなかった。それで、イエスがご自分を信じる弟子たちに、ご自分の愛を残るところなく示されるというのがこれからのテーマである。

「夕食」(2)とは最後の晩餐のことである。→ルカ22:7~13 この時すでに悪魔はイスカリオテ・ユダの心にイエスを売ろうとする思いを入れていた。悪魔は人の心に働きかけ、誘惑してさまざまな罪を犯させようとする。イエスはこの時、「父が万物をご自分の手に渡されたこと」、つまり万物を支配するすべての権威をゆだねられたことと、「ご自分が父から来て父に行くこと」、つまり世の救い主としての役割を果たすための十字架とそれに続く復活、昇天の時が来たことを確かに知られたのである。(3)

しかし、すべての権威がゆだねられ、また、十字架の時が近づいたその時に、イエスは突然、弟子たちの足を洗い始められたのである。(4,5) 普通そのような役をするのはその家のしもべ(奴隷)である。弟子たちは誰もしもべの役を果たそうとはしなかった。しかし、イエスがそれをなされたのである。これもイエスの愛のゆえであった。「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか」(6)ペテロはこのように質問した。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります」。(7)「あとで」とはイエスの十字架と復活の後のことである。その時、弟子たちはようやくその意味をさとるようになるのである。

ペテロはイエスの足洗いを拒んだ。(8)しかし、そうしなければ、「あなたはわたしと何の関係もありません」とイエスは言われた。それは大変だと思ったペテロは反対の極に走り、「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください」(9)と申し出た。しかし、イエスは言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです」。(10) イエスがペテロに示そうとされたことは、イエスが弟子たちの足を洗うということが、実は全身をきよくする行為の象徴であるということであった。そしてそれは神の人間に対する愛ゆえに、ご自身の十字架の血潮、十字架の贖いの死によって成し遂げられることなのである。「足以外は洗う必要がありません」(10)とは、イエス・キリストを自分の罪の救い主と信じ、その罪をきよめられ救われた者でも、弱く、誘惑に陥りやすい存在であり、現実には罪を犯して神と人とを悲しませることがあるので、それで永遠の滅びに行くことはないとしても、その罪の処理をきちんとしてきよめられていく必要があるということである。→I ヨハネ1:9~10 イエスはこのような救われた後の罪の始末を、足の汚れを洗うという当時の習慣と結びつけられたと考えられる。「あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません」(10)これはイスカリオテ・ユダのことを言っているのである。イエスは神であられるので、そのことを知っておられた。(11) イエスは私たち人間に対する愛のゆえにこのような十字架の道を選び取られたのである。このことを私たちは心より感謝し、誘惑や困難を乗り越えて成長し、神の栄光を現す者となろう。